

きょうは最初に、聖書をもう一か所読んでみたいと思います。新約聖書 107ページです。ルカによる福音書4章18節~19節をお読みします。

「主の霊がわたしの上におられる。  
貧しい人に福音を告げ知らせるために、  
主がわたしに油を注がれたからである。  
主がわたしを遣わされたのは、  
捕らわれている人に解放を、  
目の見えない人に視力の回復を告げ、  
圧迫されている人を自由にし、  
主の恵みの年を告げるためである」。

これが、ガリラヤで伝道をはじめたイエスの最初の説教、人々に語った最初の言葉であるとルカによる福音書は位置付けています。イエスは、旧約聖書のイザヤの言葉を引用して語っています。これはイエスによる、いわば「福音宣言」ともいえるものです。

イエスは「貧しい人に福音を告げ知らせるために」自分が来たと言います。「貧しい人」というのは、経済的に貧しいというだけの意味ではありません。当時の社会の中で小さくされていた人々のことです。具体的には、律法によって罪人であるという烙印を押されていた人々です。それらの人々は、ユダヤ教社会から罪人であるという理由で疎外されていたわけですから、実際にも貧しかったはずで、イエスはそれらの人々に「福音を告げ知らせるために」来たと言うのです。

「福音」というのは「よきおとずれ」「うれしい知らせ」という意味です。その知らせというのが、「捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げる」ことだということです。

イエスは「圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げる」と語ります。

「主の恵みの年」というのは、旧約聖書の中に言い表されているヨベルの年のことです。ヨベルの年について、詳しくはレビ記25章8節以下に記されていますが、要するに「解放の年」ということなのです。50年に1度、すべての負債が帳消しになる、圧迫から解放されて自由になる、という年です。ヨベルの年には、すべての借金は免除となり、土地は元の持ち主に返され、奴隷は解放されると定められていました。社会全体を50年に1度再平等化する、すべての人がやり直しができる、あらゆる負債から逃れて再スタートできるというのがヨベルの年であり、旧約聖書が主の恵みとして描いた、人々への解放なのです。

しかし実際はどうであったかという、イエスの時代にはそのようなことは行われていませんでした。ヨベルの年は有名無実なただまえにしかすぎませんでした。理由は簡単で

す。すべての負債が帳消しになると困る人がいたからです。それはお金を貸した側、土地を奪った側、奴隷を使う側の人たちです。すなわち金持ちであり、ユダヤ教を経済的に支えていた人々です。彼らはユダヤ教指導者たちと相談して、ヨベルの年に抜け道をつくり、自分たちが決して損をしない方法を考え、自分たちに有利に働く解釈を押しつけていきました。庶民から、貧しい人々から、やり直しの機会、再スタートのチャンスを奪っていったのです。それは主の恵みの年をないがしろにすることであり、主の恵みとしての解放を打ち消していくことにほかなりませんでした。しかし金持ちやユダヤ教指導者たちは、旧約聖書に定められているヨベルの年の実行よりも、自分たちの都合や利益を優先させることを選んだのです。

そのような状況の中でイエスは、「主の恵みの年を告げるために」自分の働きがあるのだと宣言します。そしてここから始まるイエスの活動が、自らがイザヤの言葉を引用して語った宣言どおりの働きが、十字架への道につながったのです。ヨベルの年をなくずしにしていたユダヤ教指導者たちにとってイエスの存在は、自分たちの利益や都合を損ねるものにしかうつらなかつたということです。

イエスは、自らの宣言どおりに生きていきます。小さくされている人々に福音を告げます。捕らわれている人々に解放を与えます。障がいのある人々に回復を与え、圧迫されている人々を自由へと招きます。自らの宣言どおりに人と出会い、関係をつなぎ、その関係を深めていきます。イエスとの関係に招かれた者は、救いや癒しを与えられていくのです。イエスは、小さくされていた人々との関係を築くために、その生涯を捧げたのです。

人間には、自分が苦勞した話を人に聞いてもらいたいという欲求があるようです。苦勞自慢とでもいいますか、自分はこんなに苦勞したんだということに、共感してほしかったり、同情してもらいたかったり、励まされたかったり、評価されたかったりするわけです。個人差はあっても、誰にも苦勞自慢の傾向はあるように思います。

私の経験から考えると、いわゆる牧師婦人と呼ばれる人の中には、苦勞自慢の大家、苦勞自慢の権威が多いような気がします。私の母親もやはり、苦勞自慢をさせるとなかなかのものでした。自分はいかに大変な働きを担っているか、自分がどれほどの犠牲を払って毎日を過ごしているか、自分がどんなにつらい思いをしながらみんなのために影で苦勞しているか、そんな話をしだすとなかなか止まりません。「そんなに大変ならやめておけばいいのに」と言うと、「そういうわけにはいかない」と言います。苦勞せずにはいられないという体質のようで、自虐的喜びさえ感じているふしも見受けられました。

その母も、牧師である夫が召されてからは苦勞自慢のネタ切れで、息子としては少し寂しかったりもしました。けれども今度は、同居している弟や妹が対象となって、いまだに苦勞自慢は続いています。

ある教会の牧師婦人は話が長いので、皆が閉口していました。長い話の内容は、もちろ

ん苦勞自慢です。1度捕まると最低でも1時間、ひどい時には3時間ぐらい苦勞自慢を聞かないと帰してもらえないので、教会員の方も必死です。礼拝が終わった瞬間、急いで逃げように帰る人、牧師婦人に見つからないようにコソコソと帰る人、運悪く牧師婦人に話しかけられると「さっき誰々さんがお話があるって言ってましたよ」と、犠牲者の屍を乗り越えてでも帰ろうとする人、そうなるともう礼拝出席も、スリルとサスペンスといった感じです。

それは電話でも同じでした。要件は最初だけで、あとは苦勞自慢の長話となります。ご夫妻共に教会員のご家庭で、ある日夫が仕事を終えて家に帰ると、夕食の支度ができていませんでした。妻が言います。「ごめんなさい。牧師婦人から電話があったから」。それを聞いた夫はすぐに状況を納得して、外に食事に行くことになりました。

ある時、妻は友達とショッピングに行っつついつい話し込んでしまい、帰りが遅くなりました。夫の帰宅に夕食が間に合いません。帰ってきた夫に向かって妻が言いました。「ごめんなさい、あなた。牧師婦人から電話があったから」。ものは使いようということです。

それはともかく、司会者に読んでいただいた聖書箇所、この手紙の著者であるパウロも苦勞自慢をしています。コリントの教会には、パウロがいないのを幸いに、教会の中で偉そうにしていた人たちがいました。彼らは自分たちがどれほど優れたクリスチャンであるか、自分たちの業績がどれほど素晴らしいかを自慢し、強引なリーダーシップで教会を都合のいいように牛耳ろうと思っていたわけです。彼らは自分たちが優秀であることを証明するために、パウロを引き合いに出してきて、パウロのことをけなしたり、おとしめたり、足を引っ張ったりしたのです。

そこでパウロの苦勞自慢となります。苦勞の度合いならば、こっちの方がずっと上手だと反論せざるをえないような状況にあったということです。

パウロという人は、もともと熱心なユダヤ教徒で、キリスト者を迫害していたのが、ある日突然キリストを信じるようになって、今度は外国人にイエスの福音を伝え歩くようになったわけです。

そうすると、ユダヤ教徒から見れば裏切り者ですから、あの憎いパウロを迫害しようということになります。外国人から見れば、パウロが突然やってきて、あなたたちがこれまで信じてきた神は偽者だ、キリストこそ救い主だ、イエスの福音こそ本物の神を語っているのだ、とくるわけですから、当然抵抗することになるわけです。

そのような中で、様々な形で苦勞を背負い込み、痛み付けられ、血を流し、それでもイエスの福音なんだと語っているのです。

そしてパウロは自らの苦勞を話した最後に、こう言っています。「だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか」。

苦勞して損したなどとは思っていないのです。苦勞して大変だったとも言っていないのです。苦勞なんてもう嫌だとも考えていないのです。苦勞なんて当たり前だと語っています。イエスを信じて、イエスにつながって、イエスの後をついていっているのだから、苦勞なんて当たり前だし、心が燃えないわけがないと言っているのです。

それはなぜかという、関係なのです。パウロはイエスとの関係において、強く引きつけられ、信仰を与えられ、もはやイエスなしの生き方など考えられないのです。イエスとの関係の中に入れられ、イエスのやろうとしたことを、自分なりの方法で引き継いでいくことでしか、自分の信仰を表す術を知らないのです。イエスとの関係はパウロに力を与え、イエスを思えば心が燃えるのです。

そしてそのイエスとの関係を、コリントの教会にも関係づけたいと願っているのです。イエスが小さくされている人々に福音を告げ、捕らわれている人々に解放を与え、障害のある人々に回復を与え、圧迫されている人々を自由へと招いたように、その跡をついで、人と出会い、関係をつなぎ、その関係を深めていきたいと願っているのです。イエスとの関係に招かれた者は、救いや癒しを与えられていく、そのような確信があるから、自らの苦勞もいとわず、多くの人々にイエスの福音を知らせたいのです。イエスと同じように、小さくされている人々との関係を築くために、心を燃やしているのです。

だから、「だれかが弱っているなら」自分も弱い立場に身を置こうとした。弱い立場ゆえにひどい目にあわされている人がいるなら、自分もひどい目にあわされてもよかった。社会から取りこぼされたような人には、同じ目線で語りかけたかった。なぜなら、それらの人々と関係をつなぐことを願ったからです。イエスとの関係に多くの人を招き入れることを、自分の使命だと感じていたからです。

学生時代、大阪にある釜ヶ崎という寄せ場、日雇労働者の町に、頻繁に通っていた時期がありました。冬の間は、夜中にリヤカーを引いて回り、仕事がなく外で寝るしか仕方ない人に毛布やカイロを配り、時に炊き出しの手伝いをしました。路上生活を余儀なくされている人が、なるべく死なないようにするという最低限のことしかできませんでしたが、私は釜ヶ崎が好きでした。釜ヶ崎の人たちは、時に明るく楽しく私たちを迎えてくれ、時に厳しく拒絶されることもありました。

何度も釜ヶ崎に通う内に、知り合いも増えていきます。日雇労働者の中にも、親しくなる人ができました。

釜ヶ崎という町にだんだん自分になじんでくると、冬の間だけでなく、ふらっと行ってみたくなることがありました。ちょうどその頃、私の住む場所が京都から大阪に変わっていたということもあって、毛布を配ったりするのは別に、釜ヶ崎に出かけました。

釜ヶ崎の中心部には、三角公園と呼ばれていた文字通り三角の公園がありました。そこには一晩中、何か所かでたき火の炎が上がっていました。仕事がない、寝る場所がない、そういった人々がたき火を囲んで夜を過ごすのです。

ある時その三角公園で、知り合いの日雇労働者たちのたき火の輪に入れてもらって話をしていました。そのうちに終電の時間が近くなったので、帰ろうと思って言いました。

「ほな、きょうはこれで帰りますわ。おっちゃんら風邪ひかんように気をつけてな」。するとたき火の向かいに座っていた、木村さんという人が言いました。「なんや帰るんか。たまには泊まっていったらええのに」。

「泊まっていったらええのに」と言われても、そこは公園なのですが、その言葉を聞いた瞬間、帰れなくなりました。そのたき火のまわりにいた日雇労働者たちは、冬場の毛布配りを「自分たちも仲間のためにできることをやりたい」と手伝ってくれている人たちでした。そこで私が帰ることは、関係を失わせることだと直観しました。もしそこで帰ってしまえば、関係が消滅すると思いました。「なんや、親しげに近寄ってきて、自己満足で帰りよった。外からやって来て、自分はいいことをしていますみたいな顔をして、それで、はいさよならや。しょせん善意の押しつけや。ワシらといっしょの気持ちにはなられへんのや」。そう思われるかもしれないと考えました。

だから木村さんに言いました。「そしたら、きょうは一緒に泊めてもらいますわ」。そう言って眠りにつきました。関係をつなげることだけにこだわりました。

朝方です。顔の痛みで目が覚めました。顔中が何者かにつつかれているような痛みです。パチパチという音と共に無数に飛んでくる痛み。ガバッとからだを起こして、それが雨によるものだという事に気がきました。そのままの姿勢で、しばらくじっとしていました。雨が痛いということを知りました。まわりを見るとすでにたき火の炎は消えていて、一緒にいた日雇労働者たちの姿も見えません。さすがは野宿のプロ、など思いながら、雨が痛いことに新鮮な驚きを覚えていました。もう一度あお向けに寝てみました。雨の痛みを考えました。

私は普段の生活の中で、雨が痛いと思ったことは一度もありませんでした。雨が降れば傘をさすし、傘がなくても雨の中を歩いたり立っているぶんには、雨に痛みなど感じません。地面に横たわり、無防備に顔をさらけ出して寝ていたからこそわかった痛みでした。雨が痛い。そのことに釜ヶ崎の現実を見ました。

起き上がって駅の方に向かっていくと、町の様子がいつもと違うことに気がきました。町全体の雰囲気がよくどんでいるというか、重くたれこめている感じでした。それも雨のせいでした。雨が降れば日雇いの仕事はありません。雨の中で屋外での労働はできないからです。ということは、雨の日はその町に住む日雇労働者のすべてが収入を断たれるということです。生きていくという意味においても、雨は痛いのでした。

それ以来、雨が降るたびに、雨の痛みを思い出していました。日雇労働者のその日1日の生活の中にある痛みを感じていました。

しかし忘れるのです。雨を見ても、いつしか何も感じなくなりました。出かけるのが嫌だとか、鬱陶しいなどは思います。でもそこに、以前のような、雨の痛さを思い起こすことはなくなりました。今も雨の中、野宿を余儀なくされている人々がいるのに、その日の食べ物、その日の生活、その日の命が、雨の痛さに直接影響される人々がいるのにです。

雨が痛いことを知った時の私は、釜ヶ崎に関係をもとうとしていました。そこに生きる日雇労働者たちと関係を結びたいと願っていました。だから雨が痛かったのです。

でも今、そこから離れた場所で、まったく異なった生活をしている中で、もはや雨が痛いことを感じません。

関係は薄れていくのです。関係は壊れたり損なわれたりするものです。関係は、つながりとしなければ、放っておけば、無くなってしまいます。

パウロは言っています。「だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか」。

これは雨が痛いという感覚です。弱くされている者、つまずいている者と、深く自分を関係づけようとしているパウロの姿です。

イエスは言っています。「主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」。

イエスはその宣言どおりに生き、小さくされている者と共にあろうとしました。雨が痛いことをいつも一緒に感じながら、イエスは小さくされている人に寄り添ったのです。

私は、雨が痛かったことを思い出しました。そして、雨が痛いという感覚を、せめて忘れないようにしていきたいと思っています。

イエスの解放の宣言の中には、私たちも加えられています。イエスは私たちにも寄り添ってくれます。私たちにも恵みの年を告げています。

ヨベルの年には、すべての負債が帳消しになります。私たちの負い目や、後悔や、罪は、イエスによってあがなわれ、私たちはいつでも、ヨベルの年のその先を生きることができずはなりません。すなわち、再びやり直すことや、新しい生き方をはじめることができるのです。イエスは私たちの傍らで、今もそう告げているのです。

イエスとの関係の中に私たちも在ること、その関係を広げていったパウロの言葉の力、それを忘れないでいたいと思います。

弱っている人には、私たちも弱い所に立って関係をつないでいきたいと思います。つまずいている人に向かっては、心を燃やしていきたいと願います。

それがイエスとの関係の中で、イエスの跡をついでいく者の役割だと思っからです。

そして同時に、私たちが弱っている時には、同じ所に立って働きかけてくれるイエスがいること、私たちがつまずく時には、心を燃やしてくれるイエスがいること、それを忘れないでいたいと思います。私たちもまた、イエスとの関係に招かれているからです。

イエスは雨の痛さを知っています。痛む者の痛みをわかっています。そして同じように痛みながら、私たちの傍らに立っています。